人と人の交じり合いが生む新しい価値
多様性が息づく自由闊達な学風のもと
まだ見ぬ未来を切り拓く「知の梁山泊」

18歳人口が再び急減期に入る2035年を間近にし、多くの大学があるべき姿の再検討を余儀なくされています。その中で激変する時代の渦に巻き込まれるのではなく、自ら変化を生み出し、世界に貢献する新たな価値創造の挑戦を続けているのが名古屋大学です。七つの旧帝国大学の中で最も歴史が浅い半面、6人もの大学ゆかりのノーベル賞受賞者を数えるのは、建学以来の伝統である「自由闊達な学風」の表れと言えます。

既存の枠組みにとらわれない柔軟性は2020年度、岐阜大学と共に「東海国立大学機構」を立ち上げたことにも見て取れます。世界と伍する研究大学へ飛躍する試みを杉山直総長は「ホップからステップへの移行段階」と評価します。垣根を越えて人と人が結び合う「知の梁山泊」はたゆまぬ進化を続けています。

すぎやまなおし
杉山 直総長

1984年早稲田大学理工学部物理学科卒業。89年広島大学大学院理学研究科物理学専攻博士後期課程修了。専門分野は理論天文学。名古屋大学教授、東京大学数物連携宇宙研究機構主任研究員（兼任）、名古屋大学理事・副総長などを経て22年より現職。東海国立大学機構大学総括理事・副機構長。

名古屋大学

〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町　教育推進部入試課　TEL 052-789-5765　https://www.nagoya-u.ac.jp/

自由闊達な学風を象徴する交流・探究の新拠点が誕生

名古屋大学のランドマークといえば、主要学部が集まる東山キャンパスの中央に位置する「豊田講堂」です。発明家・豊田佐吉を記念する趣旨でトヨタ自動車から寄付を受け、1960年に竣工しました。

その名古屋大学に25年7月、もう一つのシンボルが誕生しました。大学と地域、社会をつなぐ共創拠点として東海国立大学機構（東海機構）が名古屋大学構内にオープンしたCommon Nexus（コモンネクサス、愛称：コモネ）です。豊田講堂前庭から中央図書館へ伸びる緑豊かなグリーンベルトに位置し、地下鉄の名古屋大学駅とも直結します。名古屋、岐阜両大学の学生・教職員はもちろん、近隣住民や研究者、クリエイター、企業人ら多彩な人々が世代や領域を超えて交わる探究の場です。発見や出会いを生み出す新たな〝動線〟の役割について、杉山総長はこう期待を込めます。

「名古屋大学には英語で学位が取れるG30（グローバル30）国際プログラムや、NUPACE（名古屋大学交換留学受け入れプログラム）があり、それらを利用して入学してきた留学生と日本人学生の交流の場にもなってくれればと思っています。学生には4年間で一度は外国に行ってほしいと考えていますが、コモネでの出会いを通じてダイバーシティー（多様性）に触れ、交流が増えれば、外国に出る心のバリアが格段に下がると思います。また日本人学生同士でも、学部段階では文系、理系の壁を超えて話す機会があまりない。こういう場で人と人が交じり合うことは、まさに名古屋大学の自由闊達な学風に通じます」

「勇気ある知識人」の育成に欠かせない骨太の基礎教育

十分な知識・技能を土台とし、たゆまうことなく課題に立ち向かう創造性と探究心を持った「勇気ある知識人」を育成し、オンリーワンの研究力によって社会や人類全体の課題解決を目指す名古屋大学は22年、Nextビジョン2027[1]を策定しました。教育・人材育成▽研究・価値創造▽社会連携・産学連携▽国際展開――という四つの戦略を立て、着実に実行に移しています。

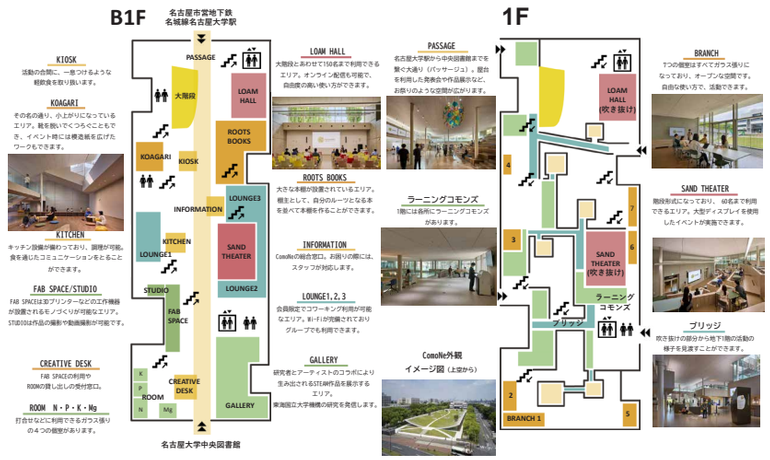
教育・人材育成の観点では、学部初年次から大学院まで切れ目のないリベラル・アーツ教育や、外国語などのコモン・ベーシックス教育（基本的なスキルとしての学修）を進めています。22年度から教育カリキュラムを一新し、数理・データサイエンスの強化と初修外国語（第2外国語）の改革が図られました。またリベラル・アーツ教育の一環として「超学部セミナー[2]」を新設しました。学部を超えた共同学修を3～4年次に実施するという従来にはなかった取り組みです。

さらに、23年4月に発足したディープテック・シリアルイノベーションセンター[3]を拠点に、学部から大学院博士課程までを対象にしたアントレプレナーシップ（起業家精神）教育もコモン・ベーシックス教育の一つです。25年度から「アントレプレナーシップ初歩」を全学教育科目の一つとして必修化しました。実際に起業する、しないにかかわらず、社会に対して新しい価値を提案していく姿勢は誰にとっても必要だという考え方に基づきます。

「さらにこのアントレプレナーシップ教育を英語化し、G30の学生なども受けられるようにすることを進めています。現代人が必要とするものがどんどん変わっていくので、コモン・ベーシックス教育も一つの決まった形にとどまりません。常に発展させていきたい」（杉山総長）

ノーベル賞展示室

Common Nexus　2025年７月開館



学びを拡張する国際展開と分野の壁を越えた融合研究

学問分野の壁を超えた研究によって社会課題の解決につながる成果も続々と生まれています。化学と生物学の融合研究を行うトランスフォーマティブ生命分子研究所は、アフリカの食糧生産に大きな損害を与える寄生植物の発芽を制御する分子を開発。飢餓解決への貢献が期待されます。宇宙地球環境研究所では、送電や通信に被害を与える自然災害である「激甚太陽風」の発生メカニズムを、歴史文献に記されたオーロラなど太陽活動の観測記録とひもづけて研究する取り組みが行われています。さらに文系分野のデジタルデータ駆動型研究を進める拠点として、デジタル人文社会科学研究推進センターが24年4月に発足しました。

「デジタル×人文社会科学で新たな総合知を創出する試みです。中でも面白いのは『ヒューマニテクス』というプロジェクトで、生成AIに西洋古典を学ばせ、例えば古代ギリシャのソクラテスに人生相談をすることもできます」（杉山総長）

名古屋大学が強みとしているのが果敢な国際展開です。15年に大学院医学系研究科が日本初となるジョイントディグリープログラム（JDP）を豪アデレード大学との間で開設しました。海外の大学と共同で博士課程プログラムを運営し、一つの学位を授与するJDPは現在、5カ国・7大学と実施、国内トップレベルの実績を残しています。また22年度には新たな国際戦略である「グローバル・マルチキャンパス構想」をスタートしました。海外の有力大学を戦略的パートナー大学（SPU）[4]に定め、現地に名古屋大学のグローバルキャンパスを設置します。25年5月にはSPUの一つである米ノースカロライナ州立大学との連携に基づき、教員引率型の短期受け入れプログラムを初めて実施。ノースカロライナ州立大学の学生23人を6週間にわたって受け入れ、企業訪問や名古屋大学教員による講義、文化体験イベント、名古屋大学の学生との交流会などが行われました。

「25年7月にはシンガポール国立大学の学生を受け入れ、スタートアップ企業でインターンシップに参加するプログラムも実施されました。お互いの学生にとってとても良い刺激になっています」（杉山総長）

多様性が生む「知の梁山泊」工学部女子枠をさらに拡充

大学ゆかりのノーベル賞受賞者が6人も出た背景には、個性豊かな人材が垣根や壁を越えて切磋琢磨し合う「知の梁山泊」たらんとする名古屋大学の伝統があります。融合研究や産学共同、国際展開はその表れですが、学生の多様性拡大に向けた入試改革も進んでいます。25年度入試では、名古屋大学で初となる総合型選抜が理学部で実施されました。また工学部の学校推薦型選抜に設けられている「女子枠[5]」が25年度入試で4学科に拡充されましたが、26年度入試（25年度実施）ではさらに物理工学科、マテリアル工学科の2学科が加わり、6学科で実施されます。

杉山総長は受験生に向けてこう呼びかけます。「大学に入ると4年間はあっという間に終わってしまいます。ですから、いろいろなチャレンジをしてほしいと思っていますし、失敗もたくさんしてほしい。そうやって勇気ある知識人として、社会のあらゆるところに飛び立って活躍できる人材に皆さんを育てていきます。意欲のある人はぜひ名古屋大学に来てもらいたいと思います」

豊田講堂（登録有形文化財）

(1) Nextビジョン2027

世界と伍する研究大学を目指し、2022年に策定された27年までのビジョン。①高大接続から大学院、学び直しまでシームレスに紡ぐ国際通用性のある教育・人材育成②世界トップ研究者が集う知の梁山泊が生み出す知の成果の創出と価値化③世界有数の産業集積地に根ざし、新たな価値を創造しグローバル/ローカル課題の解決に貢献④ニューノーマル時代の新たな国際展開――の４戦略を掲げる。

(2) 超学部セミナー

目指す専門性が自覚された３～４年次に、異なる分野の学生が学部・学年を超えたチームを組み、自主的に設定した課題解決に向けて力を合わせる。リーダーシップとチームワーク、異分野への開かれた態度、多様な人々の協調による課題解決能力を身につけることが期待される。

(3) ディープテック・シリアルイノベーションセンター

学部から大学院博士課程まで階層的に大規模で学際的なアントレプレナーシップ教育を行う。学部生向けカリキュラムとして1年次には「アントレプレナーシップ初歩」、2年次には「社会課題解決とアントレプレナーシップ」「イノベーション基礎」「シリアル・イノベーション」といった科目が用意されている。

(4) 戦略的パートナー大学（SPU）

双方向の教育・研究・産学連携活動を互恵的に推進する海外の有力大学。現在、ノースカロライナ州立大学、シンガポール国立大学、フライブルク大学、エディンバラ大学の４大学をSPUに位置付けている。2024年に採択された文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」タイプⅡ（海外展開型）において、これら４大学に渡航する本学学生に対し、高度な多文化共修を実践していく。

(5) 女子枠

2023年度入試の学校推薦型選抜で、工学部の電気電子情報工学科、エネルギー理工学科の２学科で初めて導入。25年度は化学生命工学科、機械・航空宇宙工学科にも拡充され、26年度入試ではさらに物理工学科、マテリアル工学科の２学科が加わり、もともと女性比率が高い環境土木・建築学科を除く６学科で実施される。学科ごとに３～７人の入学定員が設けられ、女子枠定員の合計は29人。